「家族援助論」講義法の一試案
――いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」，学生450人の読後記録の分析研究から――

寺　田　清　美

一．研究の目的

近年，子育て環境の変化は著しい。拍車がかかる少子高齢化社会において，多様化する家族形態・都市への人口の急激な流入による住宅問題，地域連帯感の希薄化など様々な課題があげられる。1998年版厚生白書では，育児不安を抱える親は７割と報告されている。また，平成15年，児童虐待による死亡事例として厚生労働省が把握している数値は24件（25人死亡）この虐待死の中で０歳児は44％，その内６ヶ月未満児は７割となっている。虐待した主な理由は，『誰にも相談できない地域での孤立感』と『泣く意味がわからない』である。(2005) [*1]

子育てにおける家族をとりまく問題は変化しており，乳児院や児童擁護施設のこれまでの入園理由は，保護者の死亡・入院などによる養育者不在という家族構造の欠損などによるものが主なものであった。しかし，最近では，家族の構造よりむしろ，保護者自身の養育問題が浮上してきており，ひいては家族の養育機能が損なわれてきていることが伺われる[*1]。つまり，前述した虐待問題にまで発展してきているのである。

このような状況の中，2001（平成13）年の児童福祉法改正により，保育士資格が国家資格として法定化されたことに伴い，保育士養成課程における履修科目が見直され，新たな科目として2002年度入学生から「家族援助論」が保育士養成校において，必須の講義科目として指定されるようになった。今年で５年目を迎える。

子育てをめぐる多様なニーズに対応するために，新たに加えられた科目が「家族援助論」である。この科目の目的は，『社会の変化に伴い，家族のニーズに応じた多様な支援を行うこと』とある。つまり，「保育士として家族に何をどのように支援するのか」が問われている。しかしながら，従来の「家族援助」の講義方法で，家族を援助することへの理解が学生にどのくらい浸透しているのであろうか。この科目をどのように講義するかは緊急の課題である。

阿部和子氏他は，「家族援助論」に関する研究Ⅰ―保育士養成における「家族援助論」のあり方を考える―（2006）[*2]の中で，「家族援助論」の講義内容において養成校の担当教員は，教えうるうえでの困難さとして，新規教科ゆえの難しさと学生自身が青年期であるがゆえに実感を持って「家族」を捉えにくい。としている。また事例がない。・教科書がない。なども挙げられている。

また，徳広圭子氏は，「家族援助論」の教授法―福祉援助技術の視点から（2006）[*3]―の中で，保育士はソーシャルワークの一翼を担うべく家族援助のプロセスを理解することの必要性を唱えている。さらに，木暮美香は家族援助についての考察Ⅰ（2004）[*4]の中で子ども達を取り巻く「家族」の現状を知り，理解することから家族援助が始まる，と述べている。つまり，家族援助論の教授方法とは，家族のあり方について，具体的に踏み込むようにしていかないと理解しにくいのである。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長からの「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」

の通知（雇児発第1209001号平成15年12月９日）によると，「家族援助論」における目標はF－１である。これらを鑑みて「家族援助論」の教授法を試案してみる。

本稿は，2006年２月に発刊した，『いのちの絵本「あかちゃんが教室にきたよ」』〔寺田・鈴木2006〕[*5]を教材にして分析する。この絵本を読むことにより，乳幼児の発達全体に対する学生たちの意識は変化するのか。また，実際に子育てに積極的に関わりたいという意識が出てくるのであろうか。子育て中の親への興味や意識は，若い学生たちの人生にとって，どうような意味をもたらすのか。さらに学生が複雑な課題を持つ現代の家族への理解の仕方をどのようにマスターしていくのか。それらを探り，『家族援助論講義法』の－試案としていくことを目的とする。

二．方法と対象

調査方法は，2006年５月と10月に，S短期大学１年生179名・２年生179名・K短期大学１年生59名・S短大付属高校生33名・合計450名11クラスに『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』の読後に記述式アンケート調査を実施した。高校生（SJ２）33名とS短大（S１）28名は「あかちゃんとのふれあい授業」体験者である。高校生を除く短期大学生は，いずれも指定保育士養成校の学生であり，家族援助論・乳児保育受講生である。また高校生はS短大付属高校幼児教育類型の高校生であり将来保育士を希望している学生である。これらのアンケートの回収率は100％である。その回収結果を集計し分析した。

『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』[*6]とは，１年間定期的に（年８回）小学校５年生のクラスにあかちゃんと母親がやってきて触れ合う「あかちゃんとふれあう授業」を紹介した写真絵本である。この授業の取組みは16年前に開始し，今年で13学年修了する。

三．結果と考察

１．家族援助論の目的と内容

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長からの「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の通知（雇児発第1209001号平成15年12月９日）によると，「家族援助論」における目標はFig－１であり，授業内容の項目はFig－２である。ふたつのFigから全体的にみると，「家族援助論」の主な目的は，「家族の現状の理解と家族機能の理解」・「子育て支援」の理解が挙げられるといえる。そこで，本稿は，厚生労働省の家族援助論授業目的・項目を比較参照しながら考察していく。

２．家族とは

近年，家族のあり方が変わったといわれている。それでは，過去の家族のあり方が理想的なのであろうか？　家族とは，時代の移り変わりに応じて次第に変化していくものである。家族を取り巻く社会環境は刻々と変わりつつある。

2002年（平成13年度）内閣府がまとめた国民生活白書[*6]では「家族を切り口として家族の暮らしと構造改革」と副題のもと，「家族」を切り口として，国民のライフスタイルに関する検討が行われた。まず，家族を巡る潮流変化として，「生活の糧を得る機能」「子どもを生み育てる機能」「老親等の介護や扶養をする機能」「休息・やすらぎを得る機能」の４つがあるといわれているが，現在においてはそれらの家族機能が大きく変化しているということが指摘されている。そこで，捉え難いとされている現代家族の姿について，家族援助論の授業場面や学生のアンケートを交えながら考えてみたい。

３・絵本「赤ちゃんが教室に来たよ」を使用した授業の様子

家族援助論の講義の中で，著者は『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』を副教材とし

て使用している。

この絵本の中の「小学生のことば」（緑色の文字）を学生が，「先生のことば」（水色の文字）を著者が読みお互いに掛け合いをしながら１冊の絵本を声に出して読んでいく。最初は棒読みでやや照れながら読み始める学生が，「はじめましてあかちゃん」の場面で小学生が始めて赤ちゃんを抱く場面では，まるで自分が抱いているかのように「手や足がちっちゃい」「おっことしちゃいそう」（写真２参照）とつぶやく。

生後７ヶ月の「うごきだしたひなちゃん」のハイハイの場目では，「わあっ　こっちにくるよ」「すごいぞ」と嬉しそうな表情になる。

また，初めて離乳食を食べる場面で，すりおろしりんごを食べる時に小学生が「食べてくれるかな」「おっぱいの先にくっつけえばいいじゃない」の場面では，学生は大笑いする。全員でくすぐり遊びをする場面では「こちょこちょ」といたずら交じりの小学生の表情である。学生は読者であり，読み手であることも忘れているかのように楽しそうである。

さらに，人見知りの場面では「あれ，きらわれちゃったのかな」と心配そうに読み，自分もかつて乳児に人見知りされた経験のある学生が「そうなのよね，泣かれると切ないね……」などと呟く。

さらに，ハイハイから玩具をめざしてつかまり立ちして，玩具を手にした場面では，「頑張れ」という声が上がり，不安な時のみんなにとっての安全地帯は「やっぱり家族」と語る時は，落ち着いた19歳の表情に戻っている。

ひなちゃんが病気で来られない時は心配な表情になる。またお母さんがベビーカーを持ち上げながら階段を登る場面では，感情をこめながら「赤ちゃんを育てるのはたいへんですか」と尋ねるように声に出している。

ひなちゃんが初めて立った時・歩いた時は，まるで母親になったかのように嬉しそうである。

最後に１歳のお誕生日ケーキの上のろうそくの灯を吹き消す場面では，１年間関わった母親の言葉をしんみりと味わうように聞き入り，「さようなら　ひなちゃん」の最後の言葉はゆっくりと語る口調になっている。

この掛け合いの読み聴かせ場面は，著者自身が学生と生の手ごたえを感じる充実した楽しい授業の１場面である。

この臨場感とゆっくり流れるあたたかな雰囲気はなぜなのだろうと，毎回授業終了後に考えているが，11クラスともに同じ空気が流れる。これは，学生が１冊の絵本を通して，赤ちゃんの成長から１年間の発達を知り，それを見守る小学生の気持ちに感情移入しているからではないだろうか。小学生になりきっているかのように，笑ったりして，20歳の学生のおどけた一面が垣間見られる。そして，小学生の言葉に自分を置き換えて，自分を見つめ，学生自身も幼い時を思い出し，母親父親周囲の人に愛されたことを想起しているのである。さらに，子どもの病気や母親の育児に対する理解も深まっている。

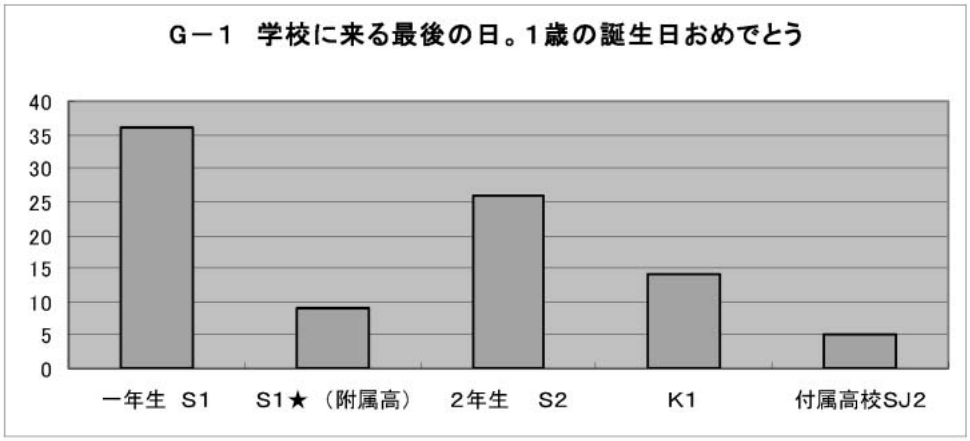
家族援助には，他者への共感能力が求められるが，この授業場面でこれらのことが育ちつつあると感じられる。

「家族」を捉えることが難しいといわれる中，写真の具体的な表情や解説の言葉から学生はこの絵本を通して，確実に家族層を理解し，援助の第１歩の気付きを得たようである。それらをアンケートの結果から探っていく。

４．子育て支援について

１）学生からみた子育て支援の視点

阿部他は，前述したように，家族援助論の担当教員は，この科目の中で「子育て支援」に講義内容の力点がおかれていると論じている。また厚生労働省も重点講義項目としているため，本稿では，



絵本読後アンケートの中から，「子育て支援」に関する内容を探ってみる。

学生はほぼ全員が，この「ふれあい授業」に参加したかった，と回答している。その代表的な理由として，次のような回答があげられている。

① 少子化の影響から，子どもに触れる機会が減っている社会で，子どもにとっても母親にとっても非常に良い体験になるから，この絵本を小・中・高校生そしてこれからお母さんになる人に読んであげたい。

②「みんなこうやって支えられてきたのだよ」ということを伝えたい。

③ バギーで階段を上るのは大変なのだな，お母さんの言葉から知った。今度あかちゃん連れの人を見たら何か出来ることないか探してみようと思う。地域の皆で子育てする楽しさ伝えたい。私が母親になったらこのような授業に参加したい。

以上のことからも，この絵本を読むことにより，子育て支援に関する意識の変化はうかがわれる。

生命や家族の大切さについての理解促進という内容が盛り込まれた絵本であるため，学生も子育て支援への理解が深まりやすいのだろう。また，家庭や地域における，明日の親となる子どもたちを対象とする家庭教育講座の実施など，子どもを生み，育てることの喜びや意義，家族の大切さ等についての理解を深める取組を推進することへの理解も会得しやすいといえる。

5．アンケート結果からの考察

アンケートの中から代表的な記述を取り上げて論じていく。なお文章は学生の記述文そのままを掲載している。

1）発達理解

①ひなちゃんが成長していく過程が分かりやすく書かれていて，しかも写真なのでより理解することが出来た。

②現在3歳の甥が生まれた時のことを思い出して〔誕生から〕1歳までの成長が早いことを思い出した。

③赤ちゃんの成長はとても早くてあっという間だと思った

④実際にだっこしてみて人形とは違うということを実感でき，いい経験をしていると思った

⑤小学生がすごく優しい目をしていてひなちゃんと心が通じ合っている感じがした

⑥この前の夏休みにいとこの子どもが初めてハイハイしたことを思い出した

⑦「あかちゃん」ってみんな同じように思っていたけれど，従妹とハイハイや離乳食の時期も違う……ひとりずつ違うってこんなことかと思う

⑧小さい頃，人形を赤ちゃんに見立ててお母さんに抱っこの仕方を教えてもらったことを思い出した。

以上は，アンケートの中の代表的なものを紹介したが，幼い子どもの発達全体に対する理解が深まっただけでなく，自分の幼い頃を想起したり，他者への興味や関心を持ち，他者への理解の深まりも感じられる。〔G－７参照〕

２）子育てに対する意識変化

①自分の子が泣いただけで何に不満があるのかを母親がすぐわかっていたから凄いと思う

②お母さんはひなちゃんが泣いた理由がわかってすごい　そして親子の絆はすごいと思った

③私が（初めて）立ったときも家族はこういう喜び方をしたのかなぁと思った

④母親の存在の大きさを実感した

⑤少子化ということで，子どもに触れる機会が減っている社会で，子どもにとっても母親にとっても非常に良い体験になる

⑥この絵本を小・中・高校生そしてこれからお母さんになる人に読んであげたい。みんなこうやって支えられてきたんだよということを伝えたい。

⑦バギーで階段を上るのは大変なのだなとお母さんの言葉から知った。今度あかちゃん連れの人を見たら　何か出来ることないか探してみようと思う。

⑧地域の皆で子育てする楽しさ伝えたい。私が母親になったらこのような授業に参加したい。

⑨子どもができたら子どもを連れて小学校に行ってみたい。自分自身も変われる気がするし，子どもたちにも幼い子どもと触れる楽しさを学んでもらえればいいな。

以上は，アンケートの中の代表的なものを紹介したが，実際に子育てに積極的に関わりたいという意識が出てきたことがうかがわれる。

３）絵本を見たことの効果

①自分も幼い頃こんなふうに支えられてきたのだなということを改めて実感し，家族は勿論他の周りの支えてきてくれた人たちに感謝しなきゃと思った。

②ガラガラのプレゼントを持って歩いてくれた場面は私も嬉しかった。小学生はもっと嬉しいだろうと思った

③おっぱいにすりりんごは小学生らしい答えで私達には思いつかない発想だと思った

④赤ちゃんと接する子ども達が心から笑っていて，とてもきれいな自然な笑顔だった

⑤初めは赤ちゃんに対して怖がっていたけれど，接することを楽しんでいてよかった

⑥みんなの笑顔がキラキラしていてよかった

⑦子ども達が感動している様子が伝わり，読んでいる私も同じような気持ちになれた

⑧若い夫婦が増えているなか中絶・虐待などが多いので，この本で子どもの大切さをわかって欲しい

⑨赤ちゃんを抱いている人を見たら手伝ってあげたいと思った

⑩赤ちゃんと何回も関わることに意味があると思う

⑪何度も会う事により発達の早さやわがままな一面も見ることが出来る

⑫写真がたくさんあり自分も実際に赤ちゃんに会っているような気分になれよかった

以上は，アンケートの中の代表的なものを紹介したが，「ふれあい授業」に関わったわけではなく，絵本を読むという，擬似体験であっても，実際に赤ちゃんとふれあった学生に次ぐ効果があったということがいえるのではないだろうか。

4）3校5つのグループからの考察

①『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』読後，一番印象に残った場面考察

『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』を読後，一番印象に残った場面（F−3参照）の上位は，最後の章NO12「学校に来る最後の日。1歳の誕生日おめでとう」の場面を選択している。全体数は450人中90人の25％であり，S短大1年生・S短大1年生（付属高校出身）K女子短大1年生である。

次の「ひなちゃんのさんぽ」の場面は76人・3位の「初めてあかちゃんをだっこ」の場面は58人であるから，印象の強さが伺われる。

この場面を選択した主な理由は感想の中にもあるが，「1年間を通してひなちゃんもお母さんも小学生たちも，気持ちが変化し成長したと感じられた」ということのようである。同じあかちゃんとお母さんが同じクラスの子ども達と年8回の関わりをもつ。その集大成ともいえる最後の誕生日を迎える場面は，授業に参加しなくても，あかちゃんとともに誕生日のろうそくの灯を消して，一緒に1歳のお誕生を祝う気持ちになっているようである。さらに授業の中で絵本を読んだ時に，「先生・母親にとって1歳の誕生日がくることはとても意味のあることなのですね」というつぶやきが学生から聞かれた。乳児の発達の理解を深めようとし，さらに乳児を持つ母親の気持ちに共感しようとしているようだ。

②NO12「学校に来る最後の日。1歳の誕生日おめでとう」の場面の考察

絵本の場面NO12「学校に来る最後の日。1歳の誕生日おめでとう」の場面（G−1参照）を5グループ毎に分析すると，S短大1年生が多く次いで付属高校出身のS短大生・K女子短大生と続く。3グループともに全体数からの割合は高い。

③S短大2年生

絵本場面「NO4　初めてあかちゃんをだっこした」と「NO11私が1歳のころ」の両場面を34人が選択した。これは，「家族援助論」履修時，家族を援助するためにまず家族を知り，家族と自分との関係を知ることから始まることの学びが，赤ちゃんを抱く自分を想起したり，自分自身を見つめ振り返る姿勢に影響がみられ，このふたつを選んだと考察する。（G−3参照）絵本に関する感想分類した中で2年生が家族への思いが他のグループに比べ優位性が高いことが（G−6）からもうかがわれる。

④S短大1年生

1年生が選択した「NO10ひなちゃんの散歩」（34人）「NO7人見知りからくすぐりっこ」（18人）「NO8ハイハイからつかまり立ち」（17人）の各場面は，あかちゃんの成長を見守る姿勢や思いやりが見られる。これらは感想からもうかがわれる。（G−2・G−8参照）

⑤付属高校生

高校生はNO6「すりおろしりんごをおっぱいの先につけたら」（7人）が一番高い数値である。このことは，小学生に年齢も近い高校2年生がより共感した部分といえるのだろう。感想の中の「すりりんごの発想が面白かった」・「小学生の言葉がそのまま載っていて自分達とも重なる部分があり良かった」との表現からも伺える。〔G−4・G−7参照〕

⑥K短大1年生

K短大1年生はNO12「学校に来る最後の日。1歳の誕生日おめでとう」（14人）の場面に次いでNO2「初めてひなちゃんが学校に来た日」（10人）を選択した。これは，感想から探ると，初めて赤ちゃんを抱く小学生の姿をみて「幼い自分を想起した」ことや自分の子が泣いただけで「何に不満があるのかを母親がすぐわかったことが凄い」と感じたからであるようだ。母親への理解の深まりが見られる。（G−5・G−8参照）

写真１　絵本「あかちゃんが教室にきたよ」

写真２　初めてのだっこ

このように，各グループともに違いが見られるが，読後に学生達は，自分を見つめることや家族を援助する具体的手がかりを見つけ出していることがうかがわれる。

５．おわりに

「家族」の定義や概念も複雑で多様化し，家族とはいったい何なのか？　という問いかけに対して，答えを一つに絞り込む事は難しい。家族の定義や方法は，その人自身が家族の中で育ち，大人になっていく過程において自分なりに感じ取っていくものともいえる。それゆえ『家族援助』の方法もその人なりのセンスが生かされていくのである。

今回の調査から，保育士志望学生が１冊の『いのちの絵本「あかちゃんが教室にきたよ」』を教材にして，その読後感から「家族観」や「家族援助」の一側面の部分を引き出すことが出来たのではないか。学生の感想の中からも従来この分野になかった家族を援助することの具体的な手がかりが見えてくる。(G−６・G−８参照)

・写真で１年間を追っているため，成長がひとめで解り，発達が理解しやすい
・小学生とあかちゃん・小学生とあかちゃんの母親の会話と写真から表情や感情が見える
・小学生は短大生に比べてより赤ちゃんの気持ちに近い（離乳食の場面ですりおろしりんごを食べないひなちゃんに向かい「おっぱいの先につければいいんじゃない」という場面）
・育児中の母親の嬉しさと辛さ（子どもの病気・ベビーカーでの階段移動）
・小学生が自分の幼い時を振り返りクラスの皆に自分史を紹介している場面
・女児が「おくるみ」を手に持ち母親と祖母が着用し家族３代愛用していると語る場面

さらに，学生自身が自分を振り返り，親への感謝の気持ちがわいてくる。その思いは，他者への理解や共感につながる。

また，「家族」に対しても，「この絵本がきっかけで自分の幼い時の様子を両親や家族に尋ね，それ以降会話が増えた。」「そのときの父親の顔はいつもの厳しさが消え「おまえのあかちゃんの時は甘えん坊でな……」と優しい顔つきに変化して嬉しかった，」との意見も聞かれる。また，自分は大切にされている，家族に愛されているということ。そして家族の中にいる自分も心地良いと感じ，自分自身も家族を愛し大切に感じていること。これらを自覚することは，将来保育士になる学生にとって貴重な実感である。

『人は笑顔で接してもらえるから笑顔を返せるのである』『愛された経験がなければ，人を大きな愛で包むことは難しい』

１冊の写真絵本『いのちの絵本「あかちゃんが教室にきたよ」』はたくさんの豊かな表情が写真

で表現され，そこには家族愛や小学生との交流愛・地域の人達が家族を支える家族援助愛が流れている。

この絵本１冊で家族援助を単純に理解しえるものではないが，具体的な示唆がたくさん潜んでおり副教材として参考になりうると考える。

例えば，「家族援助論」講義内容の「子育て支援での家族のあり方の理解と，それをふまえた相談・助言のあり方」の部分は，この絵本の中の母親が階段をベビーカーを抱えて昇る場面を活用し，学生同士がお互いに相談者になりロールプレイするなどして講義の中で子育て支援理解を高めることにつなげていく。今後益々複雑な家庭環境で育つ子どもはいると予想されるが，おおらかに，温かく，丸ごと受けとめていくこと，さらに地域で支えあう子育て支援を大切にすることを，若い保育士になるであろう学生に伝えたいものである。

今回の調査は短期大学生と付属高校生による調査であったが，今後は大学生や専門学校生などにも調査し，ソーシャルワーク的視野も含みながら，保育士養成課程における家族援助論のあり方について，更なる検討を続けていく必要があると考える。

Fig−１　授業の目的（厚生労働省の目標）

１．保育所の持つ「子育て支援」を重要な社会的役割として理解し，児童・親を含めた家族が保育の対象であることを理解させる。

２．「子育て支援」は保育所だけでなく。その他の児童福祉施設の親についても同様に必要とされることを理解させる。

３．現代の家族を取り巻く環境における家庭生活，特にその人間関係（夫婦・親子・きょうだい）のあり方を理解すること及びそれぞれをふまえて適切な「相談・助言」を行うことは，「子育て支援のために欠かせないものであることを理解させる。

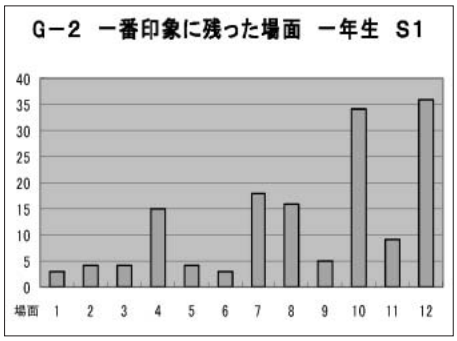
４．１〜３をふまえ，それぞれの家族のニーズに応じた多数な支援対策を提供するため，児童福祉の基礎となる家族の福祉を図るための種々の援助活動及び関係機関との連携について理解させる。

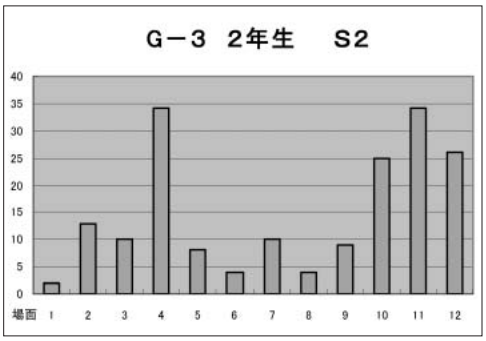
Fig−２　授業内容の項目（厚生労働省の目標）

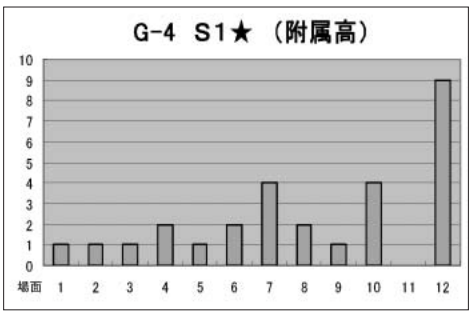
第1. 家族とは
　1　家族の意味
　2　家族の機能
第2. 家族をとりまく社会的状況と支援体制
　1 都市化
　2 核家族化　少子化
　3 男女共同参画社会の進展
第３　今日における家族生活
　1　夫婦関係
　2　親子関係
　3　きょうだい関係
第４　子育て支援としての家族対応
　1　子育てからみた家族の課題
　2　子育て支援の意義
　3　子育て支援サービスの範囲
　4　相談・助言という子育て支援
　5　虐待などの対応

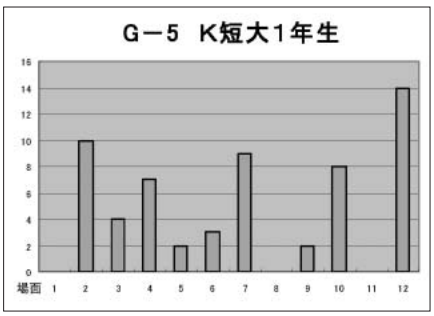
Fig-3　『あかちゃんが教室に来たよ』一番印象に残った場面							
場面	場面説明	S1	S1★	S2	K1	付属2	総数
1	「泣いている写真」を見て	3	1	2	0	2	8
2	初めて学校に、ほっぺに触れ	4	1	13	10	2	30
3	泣いておっぱいおむつ交換	4	1	10	4	6	25
4	初めて赤ちゃんを抱っこ	15	2	34	7	0	58
5	おもちゃを握って　はいはい	4	1	8	2	2	17
6	すり卸しりんごおっぱいの先に	3	2	4	3	7	19
7	人見知りくすぐりっこしてみたら	18	4	10	9	0	41
8	はいはい・つかまり立ち・玩具に	16	2	4	0	3	25
9	病気・バギーで階段は大変	5	1	9	2	1	18
10	外で遊ぶ。よちよち歩き	34	4	25	8	5	76
11	１歳の頃の話をみんなで発表	9	0	34	0	0	43
12	最後の日１歳の誕生日おめでとう	36	9	26	14	5	90
【合計】		151	28	179	59	33	450

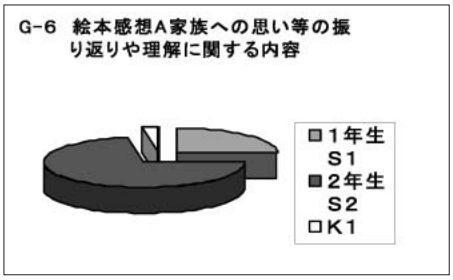
Ｓ１（S短大１年生）
Ｓ２（S短大２年生）
Ｓ１★（S短大付属校出身者）
Ｋ１（K短大１年生）

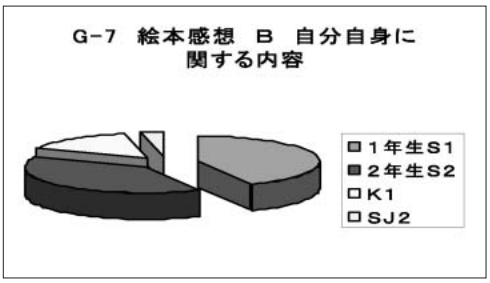


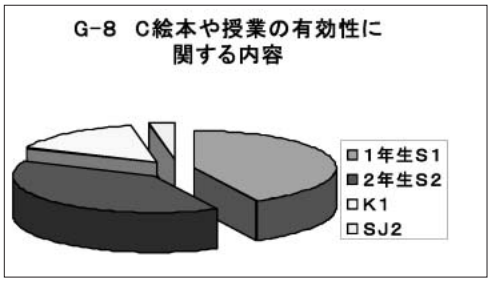












6　子育て支援サービスの課題
7　子育て支援サービスの具体的展開
8　子育て支援における関係機関との連携

註

1. 新しい少子化対策について　2005年わが国は，合計特殊出生率は1．25と，過去最低を記録し総人口が減少に転ずる人口減少社会が到来した。政府は，1990年代半ばからの「エンゼルプラン」,「新エンゼルプラン」に基づき，さらに少子化対策を推進してきた。2005年度からは,「子ども・子育て応援プラン」に基づき少子化対策が推進され，家族の絆や地域の絆を強化することが挙げられている。
内閣府は，2006年6月少子化社会対策会議決定の中で，子どもと家族を大切にするという視点に立った施策の拡充を掲げている。中でも子育て支援は，単に親の負担を軽減することのみが目的ではなく，親子の関係を良好にし，子育ての喜びを実感できることを通じて，家族機能や家族の絆を強めることにつながるよう推進する。という点に注目したい。重点的推進項目として，次の点が挙げられている。

① 子育ては第一義的には家族の責任であるが，子育て家庭を，国，地方公共団体，企業，地域等，社会全体で支援する。

② 親が働いているいないにかかわらず，すべての子育て家庭を支援するという観点も加えて子育て支援策を強化し，在宅育児や放課後対策も含め，地域の子育て支援を充実する。

③ 子どもを生み育てる人が，就業等において不利な立場に陥らないよう，仕事と子育ての両立支援の推進や，子育て期の家族が子どもと過ごす時間を十分に確保できるように，男性を含めた働き方の見直しを図る。さらに，新たな動向として，

④子育て初期家庭に対する家庭訪問を組み入れた子育て支援ネットワークの構築があげられている。
未就学期（小学校入学前まで）子育ての喜びを感じながら育児ができるように子育て家庭への支援と地域の子育てサービスの充実を図ることも挙げられている。今後，全家庭を対象とする地域における子育て支援拠点の拡充として保育士の役割は大きいといえる。多様な保育サービスの対応として，病児病後児保育サービスや専業主婦等のための緊急・一時的な保育を行う一時保育サービスなどがある。

⑤19年度から生後4か月までの全戸訪問（こんにちは赤ちゃん事業）開始
生後4か月までの乳児がいるすべての家庭を訪問し，子育て支援に関する情報提供や養育環境等の把握を行い，支援が必要な家庭に対しては適切なサービス提供につなげる。
この事業は，厚生労働省が担当省となり，子どもを持った家庭に対して，子育て不安の解消や必要に応じ地

域の子育て支援サービスの利用や専門家からの支援につながるように，子どもが誕生後一定期間内に，市町村は職員等による全家庭訪問を行い，生活実態を把握し，必要な支援サービスの紹介等を行うよう努める。さらに，市町村は子育て家庭に対して，相談相手としての地域の子育て支援者や特定の保育所の登録，関係機関の連携等，地域における子育て支援ネットワークを構築する。また，ネットワークが機能するように，地域における子育て支援の人材育成に努める。

⑥生命や家族の大切さについての理解の促進

この事業は文部科学省が担当省であり，全国の小・中・高等学校における，生命や家族の大切さ，保育体験を含む子育て理解等に関する教育を推進する。また，家庭や地域における，明日の親となる子どもたちを対象とする家庭教育講座の実施など，こどもを生み，育てることの喜びや意義，家族の大切さ等についての理解を深める取組を推進する。

引用文献

1．厚生労働省虐待防止対策室「児童虐待による死亡事例の検証結果等について」(「児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会」第１次報告）2005年

2．阿部和子; 米山岳広; 長島和代「家族援助論」に関する研究 Ｉ―保育士養成における「家族援助論」のあり方を考える― 児童学研究 ：聖徳大学児童学研究紀要 8,79-91, 2006年

3．徳広圭子「指定保育士養成校における「家族援助論」の教授法―福祉援助技術の視点から―」岐阜成徳短期大学部紀要38　2006年

4．木暮美香「家族援助についての考察Ｉ」育英短期大学研究紀要21　2004年

5．寺田清美・鈴木良東・文　星川ひろ子写真『いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」』岩崎書店　2006年

6．内閣府編「国民生活白書（平成13年度)」ぎょうせい2002年

7．内閣府「新しい少子化対策について」少子対策閣議決定資料　2006年

参考文献

1）吉田真理「家族援助論」萌文書林　2006年

2）全国社会福祉協議会中央福祉学院　「社会福祉関係施策資料集」2005年

3）厚生統計協会「国民の福祉と動向」2006年